平成23年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 ウルメイワシ

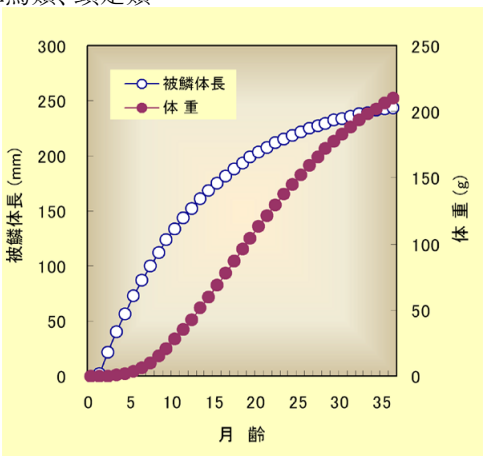
学名　*Etrumeus teres*

系群名　対馬暖流系群

担当水研 西海区水産研究所

生物学的特性

寿命:　3年
成熟開始年齢:　1歳
産卵期・産卵場:　九州周辺水域では周年、日本海北部では春～夏
索餌期・索餌場:　夏～秋季、日本海西部～東シナ海
食性:　稚魚期・成魚期ともカイアシ類、十脚類、端脚類
捕食者:　大型魚類やほ乳類、海鳥類、頭足類

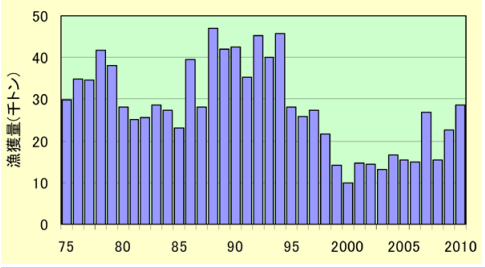


漁業の特徴

ウルメイワシ対馬暖流系群は、東シナ海区(福岡県から鹿児島県)では中小型まき網や棒受網により、日本海西区(福井県から山口県)では大中型まき網、中型まき網、定置網などにより漁獲され、日本海北区(石川県・富山県)では定置網などで混獲される程度である。漁獲が多いのは、東シナ海区と日本海西区である。なお、対馬暖流域では、沿岸での釣りや刺網による漁獲はほとんど行われていない。

漁獲の動向

東シナ海区において漁獲量は1981～1997年では7.2千～1.6万トンであったが、2000年にかけて減少した。2001年以降は増加に転じ、2010年は1.5万トンである。日本海西区において漁獲量は1986～1994年に3万トン前後まで増加し、その後2000年にかけて減少し、2001年以降は6千～1.2万トンであった。日本海北区においてはあまり漁獲されず、漁獲量は多くても2千トン程度である。

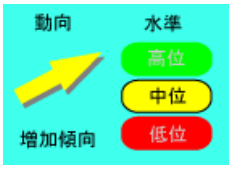


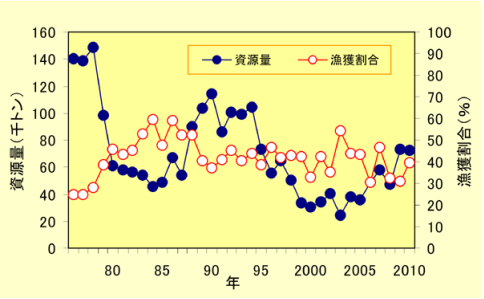
資源評価法

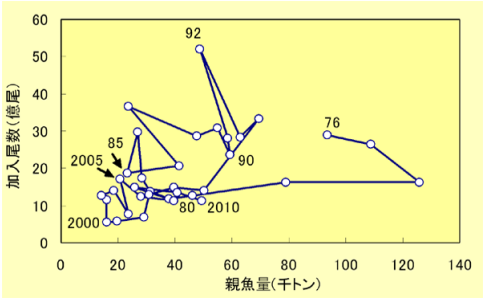
月別漁獲量と体長測定資料を用いたコホート解析により資源評価を行った。

資源状態

資源量は1988～1994年に8万トン以上であったが、その後は漸減し、2000～2005年には4万トン前後で推移した。2006年以降の近年5年間は漸増傾向にあり、2008年の資源量は4.7万トン、2009年は7.3万トン、2010年は7.2万トンであった。これより、資源動向は増加と判断した。また、漁獲の主体は0歳魚であり、親魚量と加入尾数の間には正の相関が認められた。2010年の親魚量は5万トンでBlimitを上回っており、資源量・親魚量などから総合的に判断して資源水準は中位とした。







管理方策

資源管理の基準となるBlimitは、加入量の上位10%を示す直線と、再生産成功率の上位10%を示す直線の交点に近い1984年の親魚量2.7万トンとした。2010年の親魚量は5万トンでBlimitを上回っている。2011年以降のRPSを近年5年間の中央値で与えると、Fcurrent（=F2010）で、2012年以降の資源量は2012年よりもやや増加する。ABClimitはFが基準値（F2010）で、RPSが近年5年間の中央値で推移するとした時に計算される漁獲量とした。予防的措置としてABCtargetは0.8F2010とした。

	2012年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	23千トン	F2010	0.88	37%
ABCtarget	20千トン	0.8F2010	0.70	32%

- Fは各年齢の平均

資源評価のまとめ

- コホート解析により資源量を推定した
- 資源水準は中位、動向は増加傾向
- 2010年の親魚量は5万トンで、Blimit（2.7万トン）を上回っている

管理方策のまとめ

- RPSが近年5年間の中央値で推移すると仮定した場合、現状の漁獲圧においても2012年以降の資源量は2012年よりもやや増加する
- 資源を安定して利用するためには、親魚量の確保が有効

執筆者：大下誠二

資源評価は毎年更新されます。